長崎派遣で学んだこと

高社中学校　３年　須藤　隼斗

１　青少年ピースフォーラムに参加して

僕たちは８月８日～１０日に長崎に行ってきました。

初めに平和会館ホールで築城昭平さんから話を聞きました。築城さんは 18 歳の時に被爆を体験した方でした。築城さんは爆心地から 1.8km の学校の寮で、当日の夜勤に備え睡眠中に被爆し、全身に火傷を負いました。左腕と左足先重傷を負いました。８月６日に広島に原爆が落ちましたが、国民は「新型爆弾が落とされた」としか知らなかったそうです。被害の大きさを想像できていなかったそうです。警報がいつ鳴るか分からないと思い、用心して布団を頭からかぶって寝ていたところ原爆が落とされ、爆弾が爆発した瞬間に、築城さんは吹き飛ばされてしまいました。友達と顔を見合わせて驚いたそうです。頭から足まで真っ赤だったからです。でもまだよいほうだったそうです。防空壕に行くために外に出たら外は静かでとても薄暗く何か変なにおいがしていたそうです。防空壕に着くと、防空壕は人であふれていたそうです。そこにいた人は、皮膚は赤く垂れ下がっていたといいます。それから一週間で多くの人がどんどん亡くなっていってしまったそうです。キノコのような原子雲と呼ばれる被爆地の中心にいた築城さんの話を聞いて改めて戦争の怖さが分かりました。このような事を今後おこさないように、みんなに戦争の怖さを伝えたいです。

次にピースボランティアの高校生の人たちと平和公園コース巡りをしました。浦上天主堂遺壁を見に行きました。爆風でレンガが折れたり、柱がずれたりしていました。このことから爆風の怖さが分かります。被爆当時の地層の中にはレンガやお皿類などがありました。もしかしたら被爆した誰かの骨が埋まっているかもしれないと言っていました。平和祈念像を見に行きました。右手は原爆の怖さ、左手は平和を表しています。とても大きかったです。

２　緑が丘中学校平和集会に参加して

次の日に緑が丘中学校に行きました。緑が丘中学校は学年ごとに発表会をしました。三年生の発表を見ました。とても分かりやすい劇で見ていて面白かったです。自分たちも発表しました。とても緊張しましたが、間違えずに発表することができたのでよかったです。緑が丘中学校の平和宣言を聞きました。中学生は発表する文も全部覚えていたので、すごいと思いました。平和宣言を聞いてとても胸にささりました。この発表を聞いて自分たちも平和宣言していこうと思いました。

この長崎の派遣で、戦争の怖さが今までの倍になりました。これからは自分たちが子供たちに戦争の怖さや、一日一日を大切にしようと伝えていこうと思います。これから戦争を起こさないようにしていきたいです。充実した三日間になりました。

長崎派遣で学んだこと

高社中学校　３年　武田　陽之

１　青少年ピースフォーラムに参加して

僕たちは、８月８日～１０日に長崎に行ってきました。

一日目の最初に平和会館ホールで築城昭平さんの話を聞きました。築城さんは１８歳の時に被爆を体験した方でした。築城さんは爆心地から 1.8km の学校の寮で、当日の夜勤に備え睡眠中に被爆し、全身に火傷を負い、特に左腕と左足先は重傷を負いました。８月６日に広島に落ちたが、国民は「新型爆弾が落とされた」としか知らなかったそうです。被害の大きさを想像出来ていなかったそうです。警報が鳴るかもしれない、また、なる前にガラスの破片が飛んでくるかもしれないと思い、用心して布団を頭からかぶっていたそうです。サイレンが鳴ったり、止まったりが続いていたが、布団にいたところ原爆が落とされ、吹っ飛ばされたそうです。頭から足まで血で真っ赤で、友達と顔を見合わせ驚いたそうです。逃げた時、周りはすごく静かで薄暗く、何か変なにおいがしていたそうです。防空壕には人がたくさん溢れ、人間の形をして皮膚が赤くびらびらなものだったそうです。僕も実際に被爆し、亡くなった人の写真を見ました。真っ黒で皮膚がたれていて、髪は焼けていました。そして７週間の間に人がどんどんと死んでいったそうです。隣町まで 10km ほど９時間かけて必死に歩いたそうです。三ヶ月ほど寝たきりになったそうです。築城さんの話を聞いて、どれほど原爆が恐ろしいものかとてもよく分かりました。話を聞いてどれだけ被爆した人が、どれほど怖かったかを想像して絶対に同じことを繰り返してはいけないと思いました。

次に平和公園を歩いてまわりました。高校生の人に説明してもらいました。最初に原爆落下中心地に行きました。原爆は上空 500m のところで爆発し、温度は 3000℃から 4000℃にもなったそうです。24 万人いた中で７万 4000 人の人が亡くなって、７万 5000 人が負傷したそうです。平和祈念像も見ました。とても大きかったです。

２　緑が丘中学校平和集会に参加して

二日目は緑が丘中学校に行きました。学年ごと平和について学んだことを発表してくれました。とても分かりやすかったです。特に三年生は劇をやっていました。ただ話を聞くので、あまり頭に入ってこないですが、劇はとても分かりやすかったです。その後に僕たちも中野市や高社中学校のことや、平和学習として、十三崖で学んだことを発表しました。とても緊張しましたが、はっきり発表できました。

長崎に行ってきて、あらためて戦争の怖さ、原爆の恐ろしさが身に染みて分かりました。これからは、僕も子どもたちに戦争の恐ろしさを伝えていきたいです。

長崎で学んだ戦争と原爆の威力

高社中学校　３年　松崎菜々美

１　青少年ピースフォーラムに参加して

８月８日・９日に長崎で平和学習をしました。２日間を通して平和学習する中で、私たちはまだまだ平和や、戦争の深刻さについて分かっていないのだと気付かされました。

一日目は「青少年ピースフォーラム」に参加しました。まず、築城さんという方から被爆体験のお話をお聞きしました。築城さんは当時１８歳で被爆されましたが、空襲に備え、たまたま寝るときに（夜勤のために）頭から布団をかぶっていたことで直接熱風を受けずに助かったそうです。ですが、長崎にはとても大きな被害があり、今でも苦しんでいる方々がたくさんいます。私はこのようなお話をお聞きしたとき、先に広島に原爆が落ちていたので、何か対策は出来なかったのだろうかと思っていました。しかし、長崎を含め他の都道府県に詳しい情報は伝えられていなかったそうです。そのため、知っていた情報は、８月６日に広島に「新型爆弾が落ちた」ということだけだったのです。もちろん「新型爆弾」なんて言われても威力や被害の大きさは全く分からず想像すらもできなかったそうです。また築城さんのように工場で働く学徒は勉学を後回しにし、「正義の戦争」をしていると思ってとにかく働きました。生活がとても苦しい人もいました。そんなある日、サイレンが何度もなり、８月９日１１時０２分原爆が投下されました。ものすごい光を放ち爆風と熱線と轟音と黒い放射線の雨を降らせ、一瞬にして周りの建物は焼失し人々の命を奪っていきました。被爆者が多く病院に行っても薬が足りなく、治療してもらえずに亡くなってしまったり、病気になってしまったりした人が多く、一週間の間に周りの人がどんどん亡くなっていってしまったそうです。

そんな経験から築城さんは「核の怖さを全世界が知るべきだ」とおっしゃっていました。しかし、今の世界では「核抑止」という考えがあり、核を持っていることで戦争を防止できるということでアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の五ヵ国のみ国際的に核保有が認められているそうです。ですが、いつかは全て核をなくすためにユネスコなどが力強く推すべきだと築城さんはおっしゃっていました。

その後、原爆の爪痕が残る平和公園に行きました。ここには、爆風でレンガがずれてしまった浦上天主堂遺壁や地層の中の割れた食器やレンガなどから原爆の威力が伝わってきました。また爆撃を受けた時、のどが渇いて水を求めた人が多かったことから水のモニュメントがたくさんありました。そして、願いのゾーンにある被爆当時の町の様子や被害を受け病気になった人や亡くなってしまっている人の写真が展示されているところがあり、悲惨さがストレートに伝わってきて、あれが事実なのだと突き付けられた気がして、とても重く受け止めました。

２　緑が丘中学校平和集会に参加して

二日目は、長崎市立緑が丘中学校の平和集会に参加しました。長崎の学生さんは、８月９日が必ず平和登校日になっているそうです。平和集会では、各学年の平和学習が発表されました。１年生は被爆遺構などのフィールドワークをし、平和の維持のためには、周りのことを考えることが大切だと考えたそうです。２年生は「黒本」という被爆者のありのままの体験や記憶が書かれた本から１４万人もの人が地獄のような思いをし、その犠牲の上で生きていることを忘れずに語り部となる覚悟をして、死を無駄にしたくないと決意していました。私はそんな一人一人の意識を平和につなげたいと思いました。３年生は「やめて」という群読と、「We live in Nagasaki」の演劇をしていました。群読では「海が広いのは人を殺す基地をつくるためじゃない。空が高いのは人を殺す飛行機が飛ぶためのものじゃない」という言葉が心に残っていて、戦争に対する「やめて」という思いのこもった群読で感動しました。演劇は、日本にも悪いところがあり、正義と勘違いして大量殺人を認めた人間がいけない。ということを教えてくれる素晴らしい劇でした。日本の特攻隊が自爆テロに大きな影響を与えていただとか、日本軍は暴走していただとか、知らないことだらけで、本当に深く長崎の学生さんは学んでいると驚かされました。

二日間を通して、今まで学んだことのないことを聞いたり、見たことのない遺跡や写真から戦争の悲惨さや原爆の怖さを感じたりしました。また、私たちが学んだつもりでいた平和についてとは、ほんの一部でしかなくて、小学生のときからずっと平和学習をしている長崎のみなさんと、私たちでは平和や戦争の悲惨さを語り継いでいかなければいけないということへの意識が違っていました。今回長崎に行ったことで、とても深く学ぶことができてよかったです。

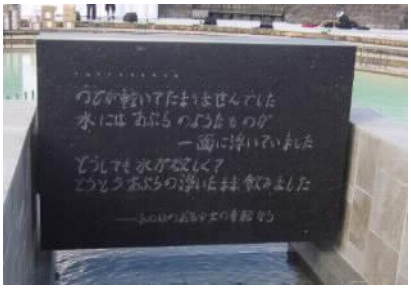
原爆の悲惨さ

高社中学校　３年　山本　果歩

１　青少年ピースフォーラムに参加して

長崎に行って実際に戦争を経験した方にお話を聞くことができた。築城昭平さんだ。昭平さんは原爆が落ちる夜、布団を頭からかぶって寝たそうだ。昭平さんも暑い中どうしてあんなことをしていたか分からないそう。だが、この行動が昭平さんを救うことになったのだ。原爆が落とされた。体が飛ばされ、壁にたたきつけられた。このときすでに空襲警報は解除になっていたにもかかわらず原爆が落とされたのだ。昼間なのに真っ暗。食べ物がない。もっと戦争が続いていたなら大半が飢え死にしていただろうと昭平さんは言っていた。みんなが防空壕に逃げる。どこもたくさんの人が入っていた。みんながひどいやけどを負い、どこが口かもわからないような人たちがたくさんいた。一週間以内にたくさんの人が死んでいった。原爆の放射線による病気だ。昭平さんは疎開していた家族からの薬で助かった。助かった理由は他にも放射線が届かない場所にいたことや影響が少なかったことがあげられる。

最後に昭平さんは、命がある限りたくさんの話をしていきたい。若い人々に、世界の人々に核の恐ろしさを伝え、核がない平和な世界を望むと話していた。



私が一番心に残っているのは平和の泉のことだ。ここに書いてあったことが切なくて忘れられない。「のどが渇いてたまりませんでした。水には油のようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとう油の浮いたまま飲みました。－ある日の少女の手記から」（被爆当時９歳の山口幸子さん）このような人がたくさんいたため、長崎には水を使ったモニュメントが多いそうです。

２　緑が丘中学校平和集会に参加して

緑が丘中学校に訪れた。長崎ではどこの学校でも８月９日が登校日になっているそうだ。緑が丘中学校各学年の発表を見た。一年生の発表で、被爆マリアというものがあった。このマリアは目がガラスでできていたらしく。目は溶け、首から上が残った状態となっていた。戦争が終わった今に戦争の悲惨さを伝えている。

二年生は黒本というものを発表していた。黒本とは被爆者の実態調査をまとめたもの。この黒本には語りたくありません、思い出したくありませんなどの言葉も書かれていたそうだ。

台風の１０倍以上の爆風で人が飛ばされる。黒い空から黒い雨が降り、14 万人が地獄のような思いをした。私たちはそのたくさんの犠牲の中で生きている。戦争の悲惨さは日本中にさらに世界中に伝えていくには、一人ひとりが語り部の覚悟をもつことが必要だ。戦争の悲惨さを少しずつ発信していき、核のない世の中をつくっていきたい。